様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　21　年　5　月　31　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５９２４０９
研究課題名（和文）　抑うつ状態の患者に対する看護師の共感技術促進モデルの開発

研究課題名（英文）　Development of a model to promote the nurses' technique of empathy with depressive patients

研究代表者　上野 恭子（UENO　KYOKO）
順天堂大学・医療看護学部・准教授
研究者番号：５０１５９３４９

研究分野：　医歯薬学
科研費の分科・細目：　看護学・地域・老年看護学
キーワード：　精神看護学・共感・うつ・看護師－患者関係

１．研究計画の概要
本研究は先立って行った萌芽研究を基に計画したものである。

(1) 2006 年度　抑うつ状態で入院経験のある通院患者 10 名に対し、面接法を用いて看護師との共感体験から共感概念の構造および関連要因を明らかにすることを目的として調査し、分析した。
(2) 2007 年度　看護師が臨床場面で体験する共感の操作的定義と構成概念を文献を用いて検討し、看護師の共感技術を促進するための測定尺度案を作成した。
(3) 2008 年度　(2)で作成した測定尺度案のパイロットスタディを実施した。
(4) 2009 年度　パイロットスタディ後修正した測定尺度を用いて本調査を行う予定である。また、(1)の研究について対象者を追加して引き続き行い、看護師の抑うつ状態の患者に対する共感的理解について考察を深めることを目標とし準備している。

２．研究の進捗状況
元入院患者であったうつ病患者 10 名に対し、修正版グランデッド･セオリー･アプローチ法をもちいて看護師との間で生じた“わかってもらえた”という入院中の体験の分析を行った。その結果、“わかってもらえない”と感じる体験のほうが多いこと、患者は“自分のことだけで切羽詰っている”状態であり“自分の意思を尊重してもらえる”体験がわかってもらえたという体験につながることなどが明らかになった。しかし対象が一精神科病院のみで偏りが見られるため、最終年度に対象者を追加する予定である。

一方、文献検討と 2005 年萌芽研究成果をとおして看護師の臨床場面での共感概念を分析し、看護師が患者に共感的な言動を示すには「患者のためになりたい」という気持ち、「患者に注目」「患者の思いの概略を把握」「その内容を確認」というプロセスを経た上で「患者のための行動」を起こすという構造が明らかとなった。また、この各下位概念に関連する要因も明らかになった。次にこの下位概念に沿って質問項目を考案し、内容妥当性を検討したうえで 39 項目の測定尺度案を作成した。一般診療科所属の看護師 221 名を対象に予備調査を行い、外部尺度との妥当性と信頼性の検討をおこなった。因子分析では４つの因子に分別され、有効な因子負荷量をもった 23 項目の信頼性係数（α係数）は 0.89 であった。本尺度の４つの下位尺度得点と外部尺度である情動知能尺度（EQS　21 項目）の下位因子得点との相関は 0.3~0.7 であり、併存妥当性があると判断された。

３．現在までの達成度
＜区分＞　②おおむね順調に進展している。
＜理由＞　4 年間の研究において、(1)看護師の患者に対する“共感”体験からその概念を明らかにすること、(2)看護師の共感技術を構造化してその測定尺度を作成すること、(3)抑うつ状態の患者が認知する共感体験とはどのような特徴をもつのかを明らかにすることにより、抑うつ状態の患者への共感技術を用いた看護モデルを構築することを目的としている。
このなかで、(1)については、論文発表には至っていないが質的研究調査は終了して

いる。(2)については、予備調査は終了し、測定尺度は完成しており、最終年度の本調査を残すところである。(3)では、質的研究の妥当性を高めるためにサンプル数を追加する必要があり、その調査の準備段階である。以上より、論文作成は遅れているが、研究進行はおおむね順調に進展していると考えられる。

４．今後の研究の推進方策

2009 年夏までに、作成した測定尺度と関連要因との関係を調べる目的で 2〜3 種類の尺度とともに本調査を行い、看護師の共感技術の特徴や傾向を検討する。また、並行して抑うつ状態で入院経験をもつ元患者との面接調査を数名分追加し、抑うつ状態患者の共感体験の特徴を明らかにする。今年度後半には両者の結果より、看護師が抑うつ状態の患者に対し、どのような共感技術を用いたかかわりをすれば効果的であるかを考察してまとめる予定である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０　件）

〔学会発表〕（計　４　件）

① 栗原加代、山川百合子、上野恭子、坂江千寿子：結婚・出産・離婚からうつ病を経験した後、人格的成長を遂げた一症例、第 48 回日本母性衛生学会、2007 年 10 月 11 日、つくば.
② 栗原加代、上野恭子、山川百合子：うつ病患者の自殺に対する自己認知の経時的変化、第 33 回日本看護研究学会、20077 月 28 日、盛岡.
③ 上野恭子、栗原加代、山川百合子：うつ病患者が入院生活において“私のことをわかってもらえた”と感じる看護行為に関する研究、第 4 回日本うつ病学会、2007 年 6 月 29 日、札幌.
④ 上野恭子、栗原加代、水野恵理子、西出弘美：臨床場面で看護師と患者・家族の体験した共感概念の分析、第 26 回日本看護科学学会、2006 年 12 月 2 日、神戸.

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕